

揚雄の文学・儒学とその立場

岡村, 繁
九州大学文学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9803>

出版情報 : 中国文学論集. 4, pp.19-33, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

揚雄の文学・儒学とその立場

岡村 繁

一

揚雄(前五三―後一八)は、その文学作品として、「甘泉の賦」・「羽獵の賦」・「長楊の賦」・「解嘲」・「趙充国の頌」・「劇秦美新」など「文選」収録の六篇をはじめ、「蜀都の賦」・「太玄の賦」・「逐貧の賦」・「反騷」・「解難」・「元后の詠」・「州牧の箴」・「百官の箴」・「酒箴」その他長短六十篇にも及ぶ多くの秀作を現在に伝える前漢屈指の文豪であった。揚雄の作品について、後漢の王充(二七―九二)が「揚子雲の篇を玩ずるは、千石の官に居るよりも樂し」と賞賛し(「論衡」佚對篇)、梁の劉勰(四六六?―五二〇)の「文心雕龍」が、しばしば揚雄を漢代随一の文豪司馬相如と比肩させて「揚馬」・「馬揚」と併称し、梁の蕭統(五〇一―五三二)の「文選」が、揚雄の作品を六篇も採録して司馬相如の七篇とほぼ匹敵させていることなどは、揚雄の文学作品が後世になってもいかに高い評価を受けていたかを物語る事象である。また揚雄は、その著述として、儒教第一の經典「易」に擬した「太玄」十卷、孔子・孔門の言行録「論語」を模した「法言」

十三卷、語彙解釈の宝典「私私」に倣った「法言」、十三卷をはじめ、当時最高の字書「蒼頡篇」を襲った「訓纂」一卷、郷國の歴史を編んだ「蜀王本紀」一卷など、思想・言語・歴史の各方面にわたって不滅の業績をのこした史上有教の碩学であった。そして、なかんずく「太玄」・「法言」については、後漢の桓譚(前二四―後五六)が「揚子の書は、文義至深にして、論は聖人に詭^{なが}わらず」と激賞し(「漢書」揚雄伝下)、つづいて前述の王充も「述べずして作る。材は聖人に擬^にる」と絶賛しており(「論衡」對作篇)、降って唐の韓愈(七六八―八二四)に至っても「晩に揚雄の書を得て、ますます孟子を尊信す。雄の書に因って孟氏ますます尊し。さすれば雄なる者も亦た聖人の徒か」と賞揚している(「讀荀子」)。これら漢唐の大儒の言葉は、少なくとも漢魏から唐代まで一千有余年の久しい期間にわたって、揚雄の著述が聖人の書にも比すべき崇高な存在であったことを立証する事例である。彼の「太玄」が、すでに後漢時代から「太玄経」と尊称せられ、また「太玄」・「法言」の両書に対して、後漢以来、つぎつぎとその注釈・論者の撰述が重ねられていることなどは、

そうした彼の著作への高い評価を有力に裏付ける現象である。

このように揚雄は、文学の面でも著述の面でも稀に見る偉大な業績をあげ、後世の儒学・文学に対して絶大な影響を与えた人物であった。まことに彼は、その知己の桓譚がいみじくも評したごとく正に「絶倫」の名に値する巨人であったにちがいないし（『漢書』揚雄伝下）、また「才智は開通し、能く聖道に入る。漢の興りてより以来、未だ此のひと有らざるなり」（『太平御覧』卷四三三引く「桓子新論」というにふさわしい傑物であったと思われる。

しかしながら一方、揚雄の言行と学問は、その名声がつとに高かっただけに、反って人びとの批判の対象になることもしばしばであった。すなわち、かの有名な「揚雄投閣」の際、それを知った京師の人びとが彼をひやかして、

惟れ寂惟れ真なるに、自ら閣より投じて、
爰に清爰に静なるに、符命を作るとは。

という俗謡を作ったり（『漢書』揚雄伝下）、また彼が經典に擬して「太玄」や「法言」を著わしたことに對して、当時の諸儒が、雄は聖人に非ざるに経を作る。猶お春秋吳楚の君、僭号して王と称せしがごとし。蓋し誅絶の罪なり。

と非難したこと（同上）などは、彼に對する中傷の最も早い事例である。降つて北齊の顔之推（五三二—？—丑九一—）が、その「家訓」文章篇において、

未だ知らず、雄の自ら「壯夫」たるや何如ぞや。「劇秦美新」を著わし、妄りに閣より投じて、周章怖懼せるは、天命

に達せず、「童子」の爲なるのみ。桓譚の（雄を）以て老子より勝れりとし、葛洪の（雄を）以て仲尼に方べしは、人をして歎息せしむ。此の人（雄）は、直だ算術に曉るく、陰陽を解せるを以つての故に「太玄経」を著わし、爲に数子（桓譚・葛洪）は、惑わされしのみ。其の遺言余行は、孫卿・屈原にこれ及ばず。安くぞ敢えて大聖の清塵を望まんや。且つ「太玄」は、今竟に何にか用いん。畜に「警詈を覆う（ふた）」

（『漢書』揚雄伝に見える劉歆の語）のみならざるなり。と酷評したのは、唐代以前における最も辛辣な揚雄批判である。かくて近世に至るや、宋の程・朱をはじめとする道学者たちが、こそつて揚雄の人品・著作を罵倒して、権勢に迎合し黄老に投合した曲学阿世の「腐儒」と決めつけ、かかる揚雄観が現在におおむね普遍化し固定化していること、すでに周知のごとくである。

この論文は、上述のごとく褒貶が極端に分れて収拾するすべもないように見える後世の揚雄観を極力排除しつつ、できるだけ揚雄の生きた前漢末期に立ち返つて、彼の文学や儒学の真相とその拠つて立つ基盤とを明らかにしようとする一試論である。従つて、そうした論述の目的と関連して、これからの推論の過程で、彼が「太玄」・「法言」を著わした動機ないし心情についても、改めて従来の見解を検討しなおす必要に迫られるであろう。

揚雄、字は子雲。蜀郡成都の人。彼は、ようやく壮齢に達するころになって始めて都の長安に上り、やがて成帝（在位前三二—前七）からそのすばらしい文才を認められて、前漢末期の宮廷文壇に多彩な創作活動を展開するわけであるが、それまでのかなり長い年月を彼はもっぱら郷里の成都で過ごしている。

ところで、揚雄がその少壮時代を過ごした郷里の蜀という土地は、わずか二百年前までの先秦時代、西南の蛮夷がたむろする未開の地であったにもかかわらず、早くも前漢の中期ごろには、やがて司馬相如（前二七九—前二七）・王褒（宣帝時代）・揚雄という漢代屈指の辞賦作家を一手に輩出するにふさわしい、一種特異な華やいた風気が醸成されていた。「漢書」地理志（秦地）に、巴蜀・広漢は、もともと南夷なるも、秦併せて以て郡となす。土地肥美にして、江水・沃野・山林・竹木・疏食・果実の饒あり。……民は稻魚を食い、凶年の憂いは亡く、俗は愁苦せずして、輕易淫佚、柔弱褊陋なり。景（帝）・武帝の間、文翁（前二世紀ごろの循吏）蜀守となりて、民に讀書・法令を教うるも、未だ能く道德を篤信せず、反つて文を好みて刺譏し、權勢を貴慕す。司馬相如、京師・諸侯に游宦し、文辞を以て世に顯るるに及び、郷党は其の迹を慕循す。後に王褒・嚴遵・揚雄の徒ありて、文章の天下に冠たるは、文翁その教えを唱め、相如その師となれるに由る。というのは、この地方に彌漫する軽薄淫靡な文芸的氣風と田舎らしい事大主義的傾向をいみじくも道破した至言であろう。揚雄が郷里にあった少壮のころ、彼のひととなりは、上述のような蜀地の氣風そのままに「簡易佚蕩」おおよっぱでだらしがな

い性格であつて、その興味と関心は、郷土のあこがれ司馬相如の麗雅な辞賦にあやかることに傾注されていたように思われる。すなわち「漢書」本伝には、若かりしころの彼の創作生活を語つて次のようにいふ。

（揚雄嘗て辞賦を好む。是れよりさき、蜀に司馬相如ありて、賦を作ること甚だ弘麗温雅なり。雄は心にこれを壯とし、賦を作ること常にこれを擬ねて式となせり。また、屈原の文は相如より過りたるに、（楚王に）容れられざるに至つて「離騷」を作り、自ら江に投じて死せるを怪しみ、其の文を悲しみて、これを読めば未だ嘗て流涕せざるなし。以為えらく「君子は時を得れば則ち大に行き、時を得ざれば則ち龍れ蛇む。遇・不遇は命なり。何ぞ必ずしも身を湛めんや」と。乃ち書を作り、往往「離騷」の文を據いてこれを反（駁）し、岷山よりこれを江流に投じて、以て屈原を弔い、名づけて「反騷」といふ。また「離騷」に旁つて重一篇を作り、名づけて「広騷」といふ。また「惜誦」以下「懷沙」に至る一卷に旁り、名づけて「畔牢愁」といふ。

これによれば、揚雄が郷里にあった時、「漢書」本伝にその全文を載せる「反騷」のほか、「広騷」・「畔牢愁」という一連の楚辞風の作品を作つていたことが知られる。また、このころ司馬相如を模範にして作つた彼の賦頌作品としては、現在定かなことはわからないが、後に彼自身が自作として紹介する「泉邸の銘」や「成都城四隅の銘」（古文苑）卷一〇載す「答劉歆書」、
「漢書」佚文にその作品名が見える「綿竹（蜀の県名）の頌」

(「文選」甘泉賦の李周翰注)など、彼の上京後に成帝から「司馬相如の文に似たり」と評せられた蜀地ゆかりの諸作品をこれに指定することが可能であろうし、さらにはその全文が現在にも伝わる「蜀都の賦」(「藝文類聚」巻六一「古文苑」巻四に引くも、上述の諸作品と同様やはり彼の成都時代の作品と推定しておいてよいであらう。

そして試みに、これら成都時代の彼の諸作品の中で、その内容を今に伝える「反騷」・「蜀都の賦」の両篇をとくと披見するならば、読者は、この辭賦作品を埋めつくす絢爛たる措辞を通して、すでにこのころ、彼の創作の力量が、当時の宮廷文壇に十分適応し得る高度な水準に到達していたことを容易に察知するはずである。

三

かくして揚雄は、三四十歳のころ、はじめて郷里の成都から都の長安に上ることとなったが、彼が上京した時期やそれ以後成帝の側近に召されるまでの経緯などについては、すでに幾人かの先学による苦心の考証があるとはいえず、いまだ必ずしも明瞭ではない。というのは、第一に、班固が「漢書」本伝において上述の時期や経緯に言及し、

初め、雄の年四十余のとき、蜀より来至して京師に遊ぶ。大司馬・車騎將軍の王音、其の文雅なるを奇とし、召して以て門下史となし、雄を待詔に薦む。歳余にして「羽獵の賦」を奏し、除せられて郎となり、黃門(天子の侍從職)に給事し、王莽・劉歆と並べり。

といつてはいるが、実は揚雄が四十歳の時(前二四)には、すでに王音(前二五)は薨じていたはずであつて、明らかに史実と食い違ひがあるからである。第二には、右の班固の文では、王音が揚雄を待詔に推薦したことになっているが、一方揚雄自身の作にかかる「劉歆に答ふる書」においては、

雄、始め能く文を草し、先に「梟郎の銘」・「王何の頌」・「階閣の銘」及び「成都城四隅の銘」を作る。蜀人に楊莊なる者ありて郎となり(「華陽國志」巻二にいう「尚書郎楊莊、成都人也。見揚子方言」)、これを成帝に誦す。成帝これを好み、以て爲えらく「相如に似たり」と。雄、遂て此れを以て外見するを得たり。(「古文苑」巻一〇)

と回想しており、また同じく揚雄の「自序」にもこの際の事に触れて、

孝成帝の時、客に雄の文の相如に似たるを薦むる者あり。上、方に甘泉の奉時・汾陰の后土を郊祠して、以て継嗣を求むれば、雄を召して承明(殿)の庭に待詔せしむ。(「漢書」本伝上)

と記しているように、揚雄を成帝に推薦した人物は楊莊(「卷」)となつていて、彼此たがいに指すとを異にしているからである。

しかしながら、これら文獻間の食い違ひについて、またぞろ突きつめた検討考証を加えることは、今の私にとつてさほど必要なことではない。私が今後の論考に必要なのは、揚雄が上京してから待詔に召されるまでのごく大ざっぱな時間的経緯と人間関係であつて、それだけが一応把握できれば目下のところ十

分である。ところで、この期間における揚雄の足跡をたどろうとするばあい、まず重視すべきは彼自身の「劉歆に答うる書」と「自序」の文であるが、この両作品の言うところによれば、彼が成帝にその文才を認められ、幸いにも待詔に召されることとなった直接の契機は、同郷出身の尚書郎（官中で文書を掌る官）揚雄の紹介によるものであった。そしてその時期は、すでに「自序」からも明らかのように、成帝が甘泉の泰時・汾陰の后土を郊祠して、皇后趙飛燕に継嗣が授かるよう祈願していたころに当るが、さらにこれを正確にいえば、永始三年（前一四）冬十月、王皇太后の詔によってこの甘泉・河東の祠が十八年ぶりに復活した時から以後いくばくもない時期と推定できる。ちなみに例を永始三年にとれば、この年、彼はちょうど四十歳であった。

一方、これよりさき揚雄がはじめて蜀から上京してきた時期は、彼が待詔に召された時からさほど以前には遡らないように思われる。なぜならば、尚書郎の楊雄が成帝に紹介した四篇の作品中、少なくとも二首——「泉邸の銘」、「成都城四隅の銘」という成都時代の近作らしいものが含まれているからであり、また「漢書」佚文に、

（揚雄）家貧なるも学を好み、制作する毎に相如の文を慕う。嘗て「綿竹（蜀の県名）の頌」を作る。成帝の時、直宿郎の楊雄これを誦す。文帝いわく「此れ相如の文に似たり」と。莊いわく「非なり。此れ臣の邑人の揚子雲なり」と。帝即ち召見し、拜して黃門侍郎となす。（「文選」甘泉賦の李周翰注に引く）

と見える「綿竹の頌」も、この挿話が事実であるかぎり、やはり彼の郷里時代の近作であつたらしいからである。とすれば、班固が「漢書」本伝において、前述のごとく揚雄の上京時期を「年四十余のとき」と誤認したらしいのも、彼が上京した時期と待詔に召された時期とが意外に接近していたからであつたのかも知れない。それはともかく、班固が揚雄の上京当初の事を叙して「大司馬・車騎將軍の王音、召して以て門下史となせり」といったのは、これを王音の最晩年のころに属する事と考えれば、十分に根拠のある記録と認めてよいであらう。

これを要するに、揚雄は、郷里の成都にあつたころ、かつてこの郷土が生んだ辭賦文学の巨匠司馬相如の作風に強くあこがれ、常にその弘麗温雅な辭賦を模範として文学の創作に熱中していたが、ようやく四十歳に程近くなつて、はじめて都の長安に上り、そこでまず大司馬・車騎將軍の王音にその文才を認められて門下史となり、越えて彼の四十余歳の時、司馬相如ばりの彼の秀作が同郷出身の尚書郎楊雄によつて成帝に紹介され、かくして彼は当時の宮廷文壇における多彩な活躍の場を獲得するに至つたものと思われる。だとすれば、相如と同じく生来「口吃」であつた揚雄が、相如と相似て不惑前後の年齢になつてから、住みなれた郷里を捨ててはるばる京師に上つたという事実は、決して彼がその「自序」でいうように「清静にして無為」なる生活に甘んじていたわけではなく、今まで孜孜として練り上げた文学的技量を自負し、鬱勃たる野望に燃えて、あわよくば相如の輝かしい文名にあやからんものと、意欲に満ちた人生の再出発に踏み切つたことを示すものではないだろうか。

それかあらぬか、揚雄が成帝の宮廷に召されてから数年の間、彼の辞賦文学に対する意欲は、正にすさまじいばかりのものがあった。すなわち、彼が待詔に召されて程なく、恐らくはその翌年と推定される正月には、甘泉行幸に従って「甘泉の賦」を奏し、その三月には汾陰行幸に従って「河東の賦」を奉り、その十二月には羽獵出御に従って「羽獵の賦」を献するなど、この一年の間に、あたかも積水の堤を決して奔出するがごとく、彫琢誇飾の限りを尽くした長篇の力作を相次いで上覧に供している。かくして彼は、「羽獵の賦」を奏上して後、その精勵を賞せられてか待詔より黃門侍郎に昇格し（『漢書』本伝）、翌年の秋には、成帝が前年の羽獵に引続き「禽獸の多きを大いに胡人に誇らんとして」催した長楊宮での校獵に供奉し、還って一千余字にのぼる大作「長楊の賦」を献上している（同上）。また、同じく成帝時代の揚雄の作品には、これら行幸扈從の辞賦だけではなく、成帝の命をうけて勇將趙充国（前三七—前五〇）の肖像画に賛した「趙充国の頌」（『漢書』趙充国伝「文選」卷四七）や、大酒飲みが生真面目な下戸をひやかす形式をとって、滑稽な口調で暗に酒好きな成帝を諷諷したという「酒箴」（『漢書』游侠陳連伝）などもある。このような彼の多くの力作からも明らかのように、成帝時代における彼の宮廷文人としての活躍は、目を見張るばかりに華麗多彩であり、かつ意欲に満ち満ちたものであった。

ところで、以上のごとく多彩で意欲的な揚雄の創作を根底から強力に支えたものは、彼の生来の文学的才能というよりも、むしろ賦頌文学に対する彼の凄絶なまでの執念であったように

思われる。桓譚の「新論」に見える次の有名な彼の言葉――

子雲も亦た言う、成帝詔して「甘泉の賦」を作らしめしとき、（これを作ることを）卒業みわたしくして、遂に倦つかれて臥したれば、五臟の地に出て、手を以てこれを収め内るるを夢みる。覚むるに及びて、氣の病むこと一年なりき、と。（『意林』卷三）は、辞賦の制作に当って「精神を傷めつける」までに至った彼の執念が、正に身の毛もよだばかりに鬼気せまる凄きを持つていたことを告白するものであるし、また同じく「新論」に見える次の挿話――

余（桓譚）少すくきより文を好む。揚子雲の賦頌を見て、従いて学ばんと欲す。子雲いわく「能く千賦を読めば、則ちこれを善くせん」と。（『北堂書鈔』卷一〇二引）

にしても、いかに彼が精勵の限りを尽くして賦頌の制作に食いつながっていたかを如実に物語る事例である。そして、こうした異様なまでの作賦に対する執念は、ただに揚雄だけに際立って見られる現象ではない。彼に先立つ前漢の司馬相如にしろ、彼につづく後漢の張衡（七八—二九九）・西晋の左思（？—三〇五）にしろ、いわば遅筆の辞賦作家たちは、いずれもかかる悲惨なまでの執念を貫き通すことによつて、みずからの辞賦作品を彫琢刻鏤し、当時の喝采を博し得たのであった。

そして一方、上述したような揚雄の創作に対する凄まじい執念は、さらに彼の胸中に深刻な苦悩を誘発したようである。すなわち、彼の「劉歆に答うる書」には次のごとくいう。

雄、郎となれるの歳、みずから奏すらく「少きとき学ぶを得ずして、心に沈博絶麗の文を好めり。願わくは三歳の俸

を受けず、且つ^{この}直事の^{つよ}の徳を休脱し、心をほしいままに注意をくつろぐるを得て、以てみずから克就せんことを」と。詔ありて「可なり。俸を奪わず」と。尚書に令して筆墨・錢六万を賜わらしめ、書を石渠に観るを得たり。是の如くにして後一歳、「繡補（刺繡のしとむ）」。『靈節（靈寿の杖）』。『龍骨（禁中の水車）』の銘詩三章を作る。成帝これを好み、遂に意を尽くすを得たり。（『古文苑』卷一〇）

揚雄が三か年の俸給を辞退し、宮廷での供奉を休脱してまで勉学に没頭したいと切望した心情には、痛々しいばかりの切迫感がある。かつて彼は故郷にあった時「少くして学を好み、博覧にして見ざるところなし」といった好学ぶりであったとはいへ、所詮は蜀という片田舎での学問でしかなかった。それにひきかえ成帝の当時、はるばると辺境から上京してきた揚雄が初めて目にした長安宮廷では、その秘閣に、武帝以来の天下の珍籍が山のごとくに積み重なり、すでにそこでは劉向（前七七—前六）ら一流の学者たちの手で膨大な典籍の校合が進められていたし、また天子の側近では、『新序』・『說苑』・『列女伝』などを著わした一代の碩学劉向が、再びその文壇の長老として君臨し、高い学識に裏づけられた数多くの賦頌や上奏文を作りつけており、その子の劉歆（？—後二三）も、揚雄と同じく黃門郎として、父とともに秘籍を讎校し、六経・伝・記・諸子を講じ、詩賦・数術・方技に至るまで究めざるところがなかったといわれ（『漢書』楚元王附伝）、一方では従来博士家に伝わった今文の学に加えて、新たに古文の学が真実の学問を標榜して勃

興しつつあった。とすれば、このような宮廷の高度な文化的環境に身を投じた揚雄が、みずからの学問にいたたまらない焦燥を感じたとしても、それは決して不自然なことではない。また、意欲満々たる当時の揚雄が、黃門郎となる前後から、上述のような周囲の刺戟をもちに受けて、今まで司馬相如を至高の模範として作ってきた「沈博絶麗の文」を超越し、さらに高い学識に裏打ちされた文学の創作を目指そうとしたのも、極めて当然な心情であったといえるであらう。

果して、『文心雕龍』は、揚雄を中心とするこの時期を、漢代文学における作風の転換期として明確に指定し、卿（司馬相如）・淵（王褒）より以前は、多く才（文才）を役して学（学識）を課せず。雄（揚雄）・向（劉向）以後は、頗る書（典故）を引ききて以て文（表現）を助く。此れこそ取（典故の利用）と与（自力の創作）との大際（大きな変り目）にして、其の分（区分）は乱るべからざるなり。（『才略篇』）と述べたり、

夫れ經典は沈深、載籍は浩漭、実に群言の奥区にして、才思の神阜なり。揚（雄）・班（固）より以下、取資せざるは莫く、力に任せて耕耨し、意を縦にして漁獵す。（『事類篇』）と論じたりしている。われわれは、この劉歆の指摘の正しさを『文選』李善注によって容易に追検することができる。とにかく漢代の賦頌文学は、際立って揚雄より以後、従来おむね辭賦の職業的専門作家の才知によって育てられてきた華麗な修辭に加えて、さらに精博な学問的知識をも大幅に受容する文学となった。そうした意味で、揚雄が意欲的に高密化した賦頌文学

は、やがて後漢以後に本格化する知識人士による賦頌文学の新たな開幕を告げるものであった。

四

だが揚雄は、それほど成都時代に司馬相如の辞賦にあこがれ、かくも成帝の官廷で賦頌の創作に執念を燃やし、久しく倦むことを知らず鏤刻の作品をつぎつぎと作ってきたにもかかわらず、意外にも哀帝（在位前六一前二）の時代から以後、再び辞賦に手を染めようとはしなかった。その理由について、彼は「自序」に次のごとくいう。

雄おし以為おもえらく、賦なるものは、將に以て飄せんとするや、必ず類を推して言い、麗靡の辞を極め、閎侈鉅衍し、人をして加うる能わざらしむるを競うなり。既に乃ちこれを正しきに帰するも、然れども覽る者は已に過てり。往時、武帝は神仙を好みしかば、相如は「大人の賦」を上りて以て飄せんと欲せしに、帝は反つて纏纒として陵雲の志あり。それに由つてこれを言えは、賦は（不正を）勸めて止めざること明らかなり。また頗る俳優の淳于髡・優孟の徒に似たり。法度の存する所（に非ず）、賢人君子の詩賦の正しきに非ざるなり、と。（『漢書』本伝下）

揚雄のこの嘆きは、恐らく彼の真情を吐露したものであろう。なぜならば、彼はこれ以外にも、賦に対しては「童子の彫虫篆刻」ときき下ろし、かつ「壯夫は為さざるなり」とまで断言しているからであり（『法言』吾子篇）、また司馬相如の賦に対しても「文麗しくして用寡し」と批判し（『法言』君子篇）、「靡

麗の賦にして、勸むること百なるも飄すること一のみ。猶お鄭衛の声を聘せ、曲終りて雅を奏するがごとし。また戯れならずや」と酷評してもいるからである（『漢書』司馬相如伝贊）。これらの言葉によれば、明らかに揚雄は、麗靡の辞を競つて相手に頹靡を勧めるような辞賦文学に対し、文学本来の目的たる「諷諫」の効果を期待することなど全くの幻想だとして、きつぱりとその制作を放棄したのであった。

とはいえ、上述のような「諷諫」の有無というありふれた理由だけでは、それほど成帝の官廷で辞賦の制作に熱中した揚雄が見せるに至ったのか、という疑問について十全な解答にはならないであろう。思うに、成帝が崩じて哀帝が即位したということは、このばあい決して単なる天子の交替だけを意味するものではなく、それは、成帝の母の王皇太后（元后、前七一—後一三）を頂点とする外戚王氏の専権体制が一挙に崩壊し、これに替つて哀帝の外戚の丁・傅両氏が新たに抬頭する、という支配勢力の総交替を招来するものであった。すなわち、かねて王氏の驕盛を憎んでいた哀帝が即位するや、時の大司馬（総理大臣）王莽（前四五—後二三）は、新帝の外戚を避けて早々と辞任帰国し、王根・王況ら他の有力な王氏たちも悪辣な中傷によつてつぎつぎと失脚して、その果ては前の大司馬王商・王根の推挙にかかる多くの官僚たちまで根こそぎに罷免され（『漢書』元后伝）、さしも華やかだった王氏一族のあわたたい凋落ぶりは、たとえ哀帝在位の数年間だけとはいえ、正に目をおおうばかりの慘澹たる状況であった。

このように栄枯のはげしい殺伐たる宮廷状況の中にあつて、
いったい揚雄はどんな感懐を持ったのであろうか。これについて
彼は注意ぶかく何一つ語ろうとはしなかつたようだけれども、
しかし彼自身にしてみれば、今は亡き成帝は、かつて自分の文
才を見抜いて無名から宮廷に召し入れ、以後も絶えずその賦頌
を愛好し重視してくれた最高の恩人であり知音であつた。また、
その成帝とともにあつた王氏一族は、最初自分の作風を奇として
門下史に採用し宮廷進出への途をも開いてくれた、いわば彼の
恩義ある主人筋にあたり、特に現在の王氏一族のホープ王莽
は、ともに成帝の側近に仕えた相知の間柄であつた。だとすれ
ば揚雄は、現在辛うじて罷免をまぬがれ哀帝の宮廷に残留でき
たとはいへ、丁・傅両氏の縁故が多い新宮廷の中にあつては、
なにか場違いな居心地の悪さ、も一つ周囲になじめない疎外感
をしみじみと味わつたことと思われる。かてて加えて、成帝と
対照的に声色を好まない哀帝は、即位後わずか三か月にして武
帝以来の樂府を廃止するなど、今まで成帝の宮廷に漲つていた
貴遊的文藝的風氣を一掃することに余念がなく（漢書・哀帝紀）、
さらには揚雄の最も親しい僚友であつた劉歆も、哀帝の初め、
「左伝」・「毛詩」・「逸礼」・「古文尚書」など古文の学を学官に
列しようとして画策して大臣や諸儒の怨恨をかい、誅罰を恐れて地
方長官に転出してた（漢書・劉歆伝）。

を見つげ生活の充実をはかるべく、今までの宮廷生活をとくと
反省吟味し、それは全く次元を異にする新しい生活態度へと
大きな転換を決意したのではなかつたらうか。もし私のこのよ
うな推測がさほど不当でないとするならば、この哀帝時代の揚
雄は、いちおう宮廷にあつて黄門侍郎の官に身を置きながらも
すでに宮廷で顧みられなくなった靡麗な辞賦の制作に今さら自
分の身心を磨り減らす馬鹿ばかりさから訣別し、可能なかぎり
自分自身の生活に引き籠つて、かねてからの憧憬であつた学問
への没入——とりわけ儒教への沈潜に踏み切つたのではなかつ
たか。

揚雄の代表的著作は、いうまでもなく儒教関係の「太玄」十
卷と「法言」十三卷であつて、いずれも知友の桓譚が「文義至
深にして、論は聖人に詭たがわす」（前出）と激賞した儒教史上不
朽の名著である。この内「太玄」は、揚雄が最も不遇の時期で
あつた前述の哀帝時代に草したものであつて（漢書・本伝下）、
その内容は古来「これを観る者は知り難く、これを学ぶ者も成
り難し」といわれるごとく（同上）、極めて難解とされてきた
ものであるが、われわれがその文面だけを眺めてみても、用語
は極度に精選され字句も推敲の限りが尽くされているように見
うけられ、その清簡至妙な文章には、彼の精魂が凝集している
感じである。恐らく本書は、かつて彼が辞賦の彫琢に傾けた精
魂の幾層倍かを費して、然る後に始めて完成した畢生の労作で
あろう。

ところで、揚雄が「太玄」を著わした目的は、彼自身が「法
言」問神篇において、

或ひといわく「玄(太玄)は何のためにせる」と。いわく「仁義のためにす」と。(或ひといわく「執(執仁)のためにせざらん。執(執義)のためにせざらん」と。いわく「雑なる勿(雑)からんのみ」と。

と明言しているように、「仁義」の精髓を宣揚することにあつたらしい。が、さらに立ち入って『太玄』を編述するに至つた揚雄の心境を推察しようとするならば、そのばあい直接これを本書自体の中から窺い知ろうとするよりも、むしろ本書の完成後ほどなくして作られた「解嘲」・「解難」、および本書と相前後する作品と見なされる「太玄の賦」等によってこれを把握する方が、より具体的でありかつ明確である。まず、彼が『太玄』を草創し以て自らを守ること泊如たる理由について語つた「解嘲」には、天地万物にも人間社会にも必ず榮枯隆替があることを纒々述べた後に、自分の執るべき生活態度を示して、

(前略)是の故に、玄を知り黙を識りて道の極を守り、ここに清(清)ここに静(静)にして神の庭(神の庭)に遊び、これ寂(寂)これ冥(冥)にして徳の宅(徳の宅)を守らん。

といつており、『漢書』本伝下・「文選」卷四五)、また「太玄の賦」にも、同じく万物・人事には必ず盛衰のあることを幾つか例示した後

豈(豈)に若(若)かんや、(許)由(許)・老聃(老聃)を師として、玄静(玄静)を中谷(中谷)・(静)虚(虚)の中に報(報)るに。

と詠じている(『古文苑』卷四)。思うに、このような玄黙・清静を慕う心情は、もちろん老荘の無為因循の思想と深いつながりを持つものであり、また揚雄自身にとつても、その若いころの

作「反騷」に強調する天命順応の人生観(『漢書』本伝上)と緊密につらなるものではある。しかし、それにしても『太玄』編述前後の「解嘲」・「太玄の賦」に至つて、ほとんど全篇にわたり、彼が執拗に人の世の無常を繰り返し、しきりに明哲保身を強調する態度は、従来(従来)の彼に比べて明らかに過度であり異常である。とすれば、この時期に至つて彼をかくあらしめた直接の原因は、ほかでもなく、かの成帝・哀帝の際の宮廷において彼が目あたりにした高官僚属の目まぐるしい有為転変、それに伴う彼自身の強い衝撃と哀嘆によるものと推測せざるを得ないように思われる。

そして、かかる隠逸的な心境にあつた揚雄は、「仁義」に代表される聖賢の教への「雑なる勿き」真髓を「玄黙」・「清静」・「寂寞」として把握し、その豊富な律曆・天文・陰陽・五行の全知識をここに凝集して『太玄』十巻を編述し、この精魂こめた著作をもって、

師曠の鍾を調うるは、音を知る者の後に在るを俟てばなり。孔子の「春秋」を作るは、君子の前睹を幾(幾)えばなり。老聃に遺言あるは、我を知る者の希なるを貴べばなり。

と彼が「解難」の結びに列挙した古聖たち(『漢書』本伝下)に倣い、名声を当今に求めず、「文章もて名を後世に成さん」ことを期したのであつた。

五

時は移つて元寿二年(前二)六月、病弱の哀帝が在位わずか六年にして未央宮に崩するや、宮廷の様相は、王太皇太后を軸と

して又もや急転を見ることとなつた。すなわち、今まで哀帝の数年間、その権勢をほしいままにしてきた外戚の丁・傅両氏や寵臣の董賢らが、哀帝の崩御とともに見る見る肅清され、一方それに替つて王太皇太后につらなる王氏一族が数年ぶりに宮廷朝堂の実権を奪回したこと、これである。特にその領袖たる王莽は、伯母の王太皇太后に召されて再び大司馬となり、さらに平帝(在位西暦一―五)の即位後幾月も経ない元始元年(西暦一)正月には、わずか九歳で即位したこの幼帝を補佐するため、大司馬に加えて太傅(天子の補佐役)にも任せられ、かつ「安漢公」(「安漢」は漢室を安定させる意)という異例の称号まで賜わつて、正に旭日昇天の勢いにあつた。このころ揚雄は、依然として黄門侍郎の官に留まり、あえて昇進を願わなかつたようではあるけれども(「漢書」本伝下)、もともと王氏の恩顧によつて宮廷に入り王莽とも旧知の間柄であつた彼の立場からすれば、今ここに哀帝時代の孤独な暗い数年が去つて、なじみ深い王氏一族が再び賑賑しく宮廷に復帰し、それに伴つて親友の劉歆も右曹太中大夫に昇任して身辺にもどつてきたことは、思うに、彼をどれほどか安堵させ、蘇生にも似た喜びにひたらせたことであらう。しかも、新たに政権の座に着いた王莽は、揚雄が心底から信奉する儒教の熱烈きわまる実践者であつた。

かつて「太玄」を草していたころの暗鬱な哀帝時代とは打つて変り、正に一陽來復の春を迎えた環境の中で、揚雄はこのころ「法言」の著述に余念がなかつたようである。ところで「法言」編纂の目的は、彼の「自序」によれば、諸子の異端邪説が聖人の教えをそしり、巧弁詭辞をもつて世人を誤らせている現

状にかんがみ、「論語」の門答形式を借りつつ、周孔の道を世に宣揚しようとしたものである(「漢書」本伝下)。「法言」吾子篇に、

古は、揚・墨(孔子の)路を塞ぎしとき、孟子は辞(辯)もてこれを闢くこと廓如たり。後(世)の路を塞ぐ者は有り。窃かにみずから孟子に比す。

というのは、そうした儒教の宣揚に取り組む彼の烈々たる気概を表明した発言である。とはいへ今の私のばあい、本書に対する関心は、その内容をなす彼の儒教思想ではなく、むしろ彼が抱いていた王莽への評価にある。というのは、「法言」において彼が王莽をどのように評価していたかを前もっていちおう明確にしておかなければ、これ以後につづく彼晩年の文学作品を考へるばあい、われわれの見方がとかく透徹を欠き、作品の本質を歪曲させる恐れさえ十分あるように予測されるからである。

「法言」の中に見える揚雄の王莽評価としては、明らかにそれとわかる表現は極めて少ないといつて過言ではない。もつとも、あえて憶測をもつて本書を読むならば、すでに従来の注解や論著がいうように、王莽に対する風刺・皮肉と解することができるか、幾つか目にとまるけれども、それらの見方は、「太玄」解釈のばあいと全く同様に、一つの蓋然性を提示するものではあつても、決して万人が承服できる確かな根拠に基づく見解ではない。今「法言」全篇の中から、揚雄がはつきりと王莽を名指して評価した文章を求めらば、本書の十三篇も大詰めを迎えた孝至篇の結びの部分に、はじめ

周公以来、未だ漢公の懿あらざるなり。勤勞は則ち阿衡に

過ぐ。

という表現が見当る。ここにいう「漢公」とは、いうまでもなく安漢公(前出)の王莽を指し、また「阿衡」とは殷の湯王を補佐した賢臣の伊尹を謂う。これによれば揚雄は、明らかに王莽を周公になぞらえ伊尹以上の人物と見立てたわけだが、天子の補佐役に対し、果してこれに過ぎる賞賛の言葉があるであろうか。そして、これをしも王莽に対する皮肉の辞と解することができるならば、もはやわれわれは未練なく学問を見限った方がよいであろう。揚雄が発したこの最高の賛辞の中には、時の太傅王莽に対する彼の並なみならぬ敬慕の情が横溢しているように私には読み取れる。

のみならず、揚雄が上述の文章に引きつづいて、実質的には王莽の裁量する当時の漢朝の善政を賛美し、

漢の興りてより二百一十載にして、天に中すること其れ庶ちかきかな。辟雍中央の国立大学以てこれを本づけ、校学方地方の学校以てこれを教え、礼楽以てこれを容り、輿服以てこれを表わし、その井井田・刑刑法を復し、人役(奴隸)を免す。唐おといなるかな。

と、高まりゆく感慨をこめて、『法言』全篇を結んでいることは、前述のごとき私の解釈が決して誤りでないことを立証するはずである。事実、王莽は、安漢公と称せられた執政時代、周孔の教えに則って、宮廷に明堂・辟雍を起し(平帝紀・元始四年)、地方に学・校・庠・序を立て(同上・元始三年)、礼を制し樂を作り(王莽伝上)、車服の制度を整え(平帝紀・元始三年)、淫祀を禁じ鄭声を放ち(同上・元始元年)、流亡を恤み疾疫を救う(同上・元始二年)など、

つぎつぎと新しい政策を打ち出して礼教の復興と仁愛の躬行に つとめ、彼の理想とする儒教政治の具体化のためにひたすらその情熱を傾けつつあった。また、王莽が古代の井田や刑法を復活し奴隸の売買を禁じたのは、その実行こそ「新」の建国後まで持ち越されるけれども王莽伝中、『法言』のこの文によれば、すでに彼の執政時代からその計画が進められていたことが考えられ、側近の官にあった揚雄は前もってそれを熟知していたものと推測される。

とにかく、『法言』全篇の大詰めが王莽に対する無上の礼賛で結ばれているという事実は、本書編纂当時の揚雄の心情を窺う上で、本書の中に散見する他のいかなる表現よりも比較を絶して重視しなければならぬであろう。そして、こうした揚雄の王莽礼賛は、彼の過去の経歴から推しても、また彼の儒教宣揚によせる強い悲願から考えても、彼の心情がたどり着く当然の帰趨であったといえるであろう。然るが故に、『法言』は、従来のように王莽の篡奪を憎む視点からのみこれを見ないで、儒教の熱烈な実践者として王莽を絶賛した著者揚雄の心情に立ち返って、改めてその立場から本書全篇を読み直す必要があるように思われる。まことに、平帝時代から本格化しはじめた王莽の清新で意欲的な儒教政治は、揚雄のごとき官廷内の儒教信奉者から見れば、聖賢時代の再現にも似た、まぶしいばかりの善政であったはずであり、また史実に照してみても、王莽が興隆の一途にあったこの当時、その儒教政治の破綻は、いまだ徴侯の影すらも見せてはいなかった。

王莽に対する揚雄の敬慕が以上のごとくであったとするなら

ば、やがて王莽が群臣の推戴を受けて「新」王朝を創建した当初(西暦九)、揚雄がその建国を壽ぎ「新徳を昭著し、これを無窮に輝かさん」ことを念願して有名な「劇秦美新」(「文選」卷四八)を奉呈したことや、ついで王氏の象徴であった王太皇太后の薨去を悼んで「新室文母太皇太后(元后)の誄」(「古文苑」卷二〇)を制作したことも、「法言」のばあいと同様に彼の偽らない心情の発露として容易に了解されるはずである。

それにしても特に「劇秦美新」のばあい、従来とかく後世の国家倫理を基準にして揚雄の無節操な阿諛ふりを非難するが、揚雄の立場から見れば、それは恐らく見当はずれな論評に属するであろう。なぜならば、第一に、揚雄が儒教の熱心な信奉者であるかぎり、周孔の道の実現こそ最も希求するところであつて、その理想の前には王朝の興亡などさほどに重要な問題ではなかつたはずだからである。第二に、当時すでに儒教の思想体系の中に組み込まれていた陰陽五行の説に従えば、王朝の消長交替は決してあつてはならないものではなく、むしろ儒教の示す法則に合致した当然至極な相生現象であつたからである。第三に、なるほど讖緯や符瑞は、漢朝を篡奪する際に王莽が最大限に利用したものはあるけれども、その利用はあくまでも隠密に行なわれた事であつて、王莽が隠密裡にこれを利用して絶大な効果を挙げ得たという事実は、明らかに讖緯・符瑞が当時の朝野にすこぶる流行し、官民がそれを頭から信仰していたことを物語る事象であり、かつ当時の儒教が、かかる讖緯・符瑞をもその教理の中に溶かし込んでいたとあつては、揚雄がそれを神妙なものとして素直に受け入れるのは当然であり、もし反

対に彼がそれを否認したとすれば、その方こそむしろ不自然な思考態度と判断せざるを得ないからである。第四に、後世の王莽觀の基盤となつた班固(三二—九二)の「漢書」王莽伝は、班固が西漢王室の功業を宣揚する立場上、とりわけ悪意に満ちた伝記に作り上げられて見なければ、班固自身の説明部分を切り捨てて客觀的にこれを見たばあい、少なくとも揚雄生存中の「新」王朝初期においては、王莽の儒教をふまえた善政が陸続と施行され、これといった失点はまずなかつたと認められるからである。

六

以上、揚雄の文学・儒学について私の考えるところを論じてきたが、これを要するに、われわれが揚雄の賦頌文学やそれを支える思想・心情を考察するばあい、従来のごとく漠然と彼を「漢末の宮廷文人」としてのみ見ないで、もともと王氏一族の朋党に属した宮廷文人として彼を把握するのが妥当であり、また彼を国家倫理ないし王朝倫理の視点からのみ褒貶しないで、まず国家・王朝を越えた絶対的な存在として当時の儒教を位置づけ、然る後そうした当時の儒教の信奉者として揚雄を理解するのが至当であるように思われる。少なくともかかる視点から揚雄を見つめ直した時、はじめて、辞賦文学や司馬相如に対する揚雄の評価の急激な反転、「太玄」や「法言」の編述に凝集された彼の学問・思想への沈潜、同じく王莽の政権下で作られた「法言」と「劇秦美新」との間の心情的なつながりなど、彼の文学・学問に関する重要な問題点に対して、いくばくか筋道

の通った説明をつけることができるであろう。

それにつけても、従来の論著や注解が言及しているように、いきなり王莽を漢室の篡奪者と決めつけて、かかる君臣の論理を基準にして揚雄を褒貶し、これは揚雄が王莽を風刺した文章だの、それは揚雄が王莽に阿諛した作品だのと評価することは、古今の中国学者がとかく陥りがちな先入主優先の硬直化した論理構成によるものとはいえ、明らかに恣意的でありかつ便宜主義的であつて、私には、にわかには賛同しかねるものである。

とにかく揚雄は、辞賦を作つてはひたむきな辞賦の作家であり、儒学に転じては又ひたすらな儒教の学究であり信奉者であつた。もつとも彼には、その最晩年のころ、かの「投閣」のごとき見苦しい狼狽ぶりを見せたことがあるにはあつたが、おむねその全生涯を通じて彼は、前述したように、辞賦なり儒教なり彼が目標として定めた対象に向つて、みずからの精思を投入すること極めて鋭角であつた。そしてそれは、いかえれば彼自身の内部へのひたむきな沈潜を意味するものでもある。

こうした対象への没入ないし自己への沈潜を通して不朽の創造を志向する生活態度は、揚雄という前漢末期の名もない知識人が、自己の分を守りつついみじくも見つけ出した一つの有意義な生きる道であつた。彼のこうした生活態度の根底には、立て前としての儒教を堅持しつつも老荘に色濃く裏打ちされた隠遁思想が横たわり、研ぎすまされた彼なりの合理主義さえ少なからず関与しているようにも思われるが、後漢の桓譚や王充は、正にそうした揚雄の生き方を継承し深化させた人びとであつた。

(一九七三・九・一五)

註

(1) 主要なものに、宋の司馬光『資治通鑑考異』巻一(漢成帝元延元年「揚雄待詔」の項)・清の周壽昌『漢書注校補』巻四八・近人の施之勉氏「揚雄奏甘泉羽獵二賦在成都永始三年考」(大陸雜誌)第四卷第二期、一九五二年)がある。

(2) 「漢書」成帝紀による。なお、「漢書」郊祀志下には「永始元年三月、以未有皇孫、復甘泉・河東祠」とあるが、これは誤りであろうと思われる。なぜならば、第一には、趙飛燕を正式に皇后に立てた永始元年六月(成帝紀)より三か月も先回りして、甘泉・河東の祠を復活し継嗣を祈願するのは、帝室の行動としていかにも不見識であり、しかもその時これに関して王皇太后の詔が有司に発せられたとなると(郊祀志下)、なおさら不自然な感を免れないからである。第二には、その王皇太后の詔に「春秋六十、未見皇孫」とあるが、この表現は、皇太后が五十六歳であつた永始元年よりも、五十八歳であつた永始三年の方がはるかにふさわしいからである。第三には、「漢書」成帝紀によれば、永始四年から以後、はじめて「甘泉」・「河東」の行幸と「雍」の行幸とが、正確に毎年交互して繰り返されるようになっており、この規則的な行なわれ方から推せば、王皇太后の詔は、やはりその前年の永始三年冬十月に発せられた可能性が明らかに大きいからである。

(3) 「文心雕龍」神思篇およびその范文瀾氏の注を参照。

(4) 前漢末期に至り、辞賦を評価する唯一の基準として、揚雄が必要素以上に「諷諫」を強調しはじめるのは、恐らく当時の宮廷で特に劉歆らにより高い評価を受けはじめた古文学の「毛詩」の影響

によるものであろう。「諷諫」主義は、当時の詩経四家の中でも特に「毛詩」が強調するものであった。

(5) 哀帝時代における揚雄の作品としては、建平二年(前五)の「対詔問災異」(『漢書』五行志中下)・建平四年(前三)の「上書諫勿許单于朝」(『漢書』匈奴伝下)がある。いずれも公的な達意の文章であつて、さほど彫琢を加えた形跡はない。

(6) 「太玄」については鈴木由次郎氏『太玄易の研究』(昭和三九年、明德出版社刊)、「法言」については鈴木喜一氏『法言』(昭和四七年、明德出版社刊)という労作がある。

(7) 「玄」(黙)は「淮南子」主術訓に、「清」「静」は「老子」第四章に、「寂」「寞」は「莊子」天道篇にそれぞれ見え、いずれも老莊思想から出た用語。

(8) 「老子」第二十八章に「知其榮、守其辱、為天下谷」という。

(9) ちなみに王莽は、平帝の元始四年(西暦四)天子を補佐することと殷の伊尹(阿衡)・周の周公(太宰)に匹敵する大臣として、而聖賢の称号を合わせた「宰衡」の号を加えられている。(『漢書』王莽伝上)

〔附記〕

この論文は、昭和四十八年度文部省科学研究費による総合研究「中国駢文の性格とその史的考察」の研究成果の一部である。